
百合男と腐女子とその他もろもろ

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百合男と腐女子とその他もろもろ

【Nコード】

N1917Z

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

「はぁ」と溜め息をつく主人公。容姿に恵まれ、頭もよく、性格もいい。

だが彼は、百合が大好きという特殊性癖を持っていた。

それを治そう、と放課後誰もいない教室で、その他悩みを抱えたメンバーと共に雑談する、何事も無いほのぼのした話。

百合男と腐女子の出会い（前書き）

本当に何事も無い学生の雑談を書いたものなんで、つまらないかもしれないです。

百合男と腐女子の出会い

百合男

「はあ……」

スズメがチュンチュンと鳴き、空模様は快晴、外では運動部が元気に活動をしている。

そしてここは誰もいない教室、何一つ動かず、自分は息をしているのか？ と疑問を覚えるほどの静寂が教室を支配していた。

まあ、仕方のないことだ。好きな男……いや、好きだった男に告つてふられた挙句、さらにその男が特殊な性癖をお持ちだったら……ああなるだろう。

「い……っ、いやあ！ こ、来ないで！ へ、へ、変態！」

変態変態変態変態変態……

「ぐわあああつつつ！」

女子に言われた「変態！」という言葉に耐えられなくなり、頭をかきむしった。

なぜあそこで暴露したのだろうか？ これは一生考えていかなければならない人生の宿題だな。

一方腐女子

「ごめんなさい！」

「え……っ」

私は今、普通の女子ならまず断らないであろうイケメンの告白を断つたばかりだ。

「な、何で？」

そのイケメンは自分なら絶対に断られまいと過信していたらしく、今私が言い放った言葉の意味がわからないといった様子だ……正直この手の男は気に食わない。こういう「自分は格好がいいから大丈夫」と思っている人は、断つてもしつこく付きまとってくる。なので、非常に不本意ではあるが……自分の特殊な性癖を暴露しようと思う。

大体の人は私の性癖を知ると、顔を青ざめさせて一歩後ずさり、脂汗を浮かべては「絶対に言わないであげるから」とか言いながら走って逃げていく。

その最終兵器をブレザーの内ポケットから取り出して見せた。

「私は……こういうのが大好きなんです！」

そのイケメンはそれを見た瞬間、一歩後ずさってそのまま走り去っていった。

……今までの人たちよりひどかった。何だか笑えてくる。

だけどこのままじゃ将来男の人と付き合うこともできないし、結婚もできない。

早くこの性癖をどうにかしなきゃなあ。

百合男

「はあ、はあ」

やばい、このままじゃ塾に間に合わない。
そう思いながら廊下を疾走した。

腐女子

「はあ、はあ」

どうしようこのままじゃ間に合わないよ。
そう思いながらスカートがめくれない程度の最高の速さで、廊下を疾走した。

渡り廊下・百合男

「はあ、はあ」

はあ、はあ、前から女子が走ってくる。
凄く、凄く……

腐女子

「はあ、はあ」

はあ、はあ、前から男の人が走ってくる。
凄く、凄く……

百合男

「可愛いけど興味ない！」

腐女子

「イケメンだけど興味ない！」

そして疾走しながら右、左、右、左、左、右と、どちらも道を譲り
合った結果……

ドンッ！！

「痛つてえ」

「痛ったあい」

そしてお互い謝りながらも急ぎの用があったので、二人は走り去っ
ていた。

今後この二人は、なんやかんやで色々関わる事になる……かも？

百合男は集めてみた

百合男

「はぁ、間に合った」

今僕は塾の目の前にいる、月能研といわれる塾だ。

ここに通う学生はいわばお嬢様、ボツチャンなどの金持ちで、生まれながらにしてのエリートなどが通う塾だ。

そういえば自己紹介がまだだったような気がする。

僕の名前は篠崎徹だ。しのざきとある生まれながらのエリートと呼ばれている。

容姿端麗、頭脳明晰、こんな言葉や、眼鏡が合う男……だと言われている。

勘違いしないでくれ、自分で思っているわけではない。他人からそう言われるのだ。

「ふう、間に合った」

……何だろう、この声はどこかで聞いた気がする……思い出せそうで思い出せない感覚。

あぁ、むず痒い。

僕はそういうのが気になったら必ず考えて、頭の中で正解を導き出してから見たりするのだが……

なぜかこの声に関してはすんなりと思いつけない。

体の中で拒絶しているような……でも僕と同じ雰囲気を感じ出して仲間意識があるというか。

はぁ、仕方がない。どうしても気になる。

そこで隣を見てみた。瞬間、記憶のフラッシュバック。ものすごい勢いでこの人と会った、時、場所を思い出した。

そして……イラッとした。

「あなたは……」

腐女子

「ふう、間に合った」

本当に危なかったなあ。この月脳研一秒でも遅刻するとアウトだからね。もし遅刻したらまず、親に「お宅のお子さんが遅刻しましたよ。なので今日一日預からせてもらいます」って言われて、そのあと鬼教師・佐藤姫鬼さとうきめさんに監視されながら一夜漬けすることになるからね。

あ、そういえばまだ自己紹介がまだだったね私は彩陶桜さいとうやぐらと言います。うーん、自己紹介をまだまだしたいんだけどねえ……さっきから横の人の視線をビシビシと感じるんだよね。

私は何にも狙われるような事してないし、そんなに大金持ちでもないし……

でも何だろう……この気持ち。

拒絶しているようで、その逆な気持ちもあるような……何となくだけどこの、私にビシビシ視線を浴びせている人とは、友達になれるような気がする。

「あなたは……」

あれれ？　なんだかこの声聞いたことがあるなあ。

でもどこでだったっけ、昔から物覚えは悪かったしなあ、私。

まあ、見ちゃえばいいだけの話なんだけど。

と、隣の人を見た瞬間……イラッとした。

あの失礼男だった。

「あんたは……」

百合男&腐女子

「僕のことを『イケメンだけど興味無い！』って言った失礼女！」

「私のことを『可愛いけど興味無い!』って言った失礼男!」
タイミングぴったし。息もぴったしに二人同時に叫んだ。
周りの人の視線が痛い。

百合男

「何ですか、会ってそうそう謝罪もしないとは」
本当に失礼だ。

会って一言目で「失礼男!」と言われたのは初めてだ。

あと、つい叫んでしまったではないか。

こんなに辱めを受けたのはいつ以来だろうか。

そう言くと女は顔を赤くした。おお、怒ってる。

「なっ、それはこっちのセリフよ! あんたが謝ったら私も謝ってあげるわ」

……ふう、何で女子と、しかもこんな大和撫子からかけ離れた女子と話して、自分は高揚感にに浸っているのだろうか。

一瞬僕は考え込んだが、その疑問はすぐに解けた。

そう、普通に話せている。これがいいんだ。

今までの女子は、僕が話しかけるとすぐに赤面して、ドモリ口調になってしまう。

だがこの女は違う。僕の容姿(何回も言うが僕が自画自賛しているわけではない)を見てドモルことなく、話している。

まあ、一時の幸福を与えてくれたのは感謝しよう、心の中でだが。そのまま、僕とその女は睨み合っていた。

何分が過ぎただろうか、今や『先に塾には行ったほうが負け』みたいな戦いになっている。

そして、塾の門限まであと30秒……20秒……10秒……

9、8、7、6、5、4、3、2……とここで両者一斉に動いた。

「僕が」

「私が」

「「先に入る！！」」

スッパアアアツツツン！！

「「……っ」」

僕と女の前に、通常の何倍の太さ、長さがある竹刀が振り下ろされた。振り下ろされた場所はくつきりと窪んでいた。普通のコンクリートなのにだ。

その状況に震えながら、僕と女が顔を上げると、そこにはパリッと糊のきいたスーツを身に纏った、美人鬼教師、姫鬼先生がいた。普通の体躯なのにどこにそんな特製竹刀を持てる力があるんだ、と思っ
ていると、僕たち月脳研の生徒にとっては死刑宣告と同じ意味合いを持つ言葉を、僕たちに言い放った。

「はい、門限守らない子にはお仕置きが必要ね」

「「いやあああああつつつつつ！！！！」」

僕たちはその日一日勉強に費やした。

翌日。

キンコンカーンコン

授業も終わり、今のチャイムは完全下校のチャイムだ。
なぜ、どの部活にも属してない僕がこんな時間までに学校にいるか
というと。

それは自分の特殊性癖を治すためには、同じような奴を集めるのが
いい、と、ふと思いついたので、そのポスターのデザインを練って

いたのだ。

そしてもう作ったが……無味乾燥すぎる。

まあいい、必要事項はしっかりと書かれている。

そして帰り際、昇降口の入ってすぐのところにある掲示板に画鋏でしっかりと止めておいた。

さあて、仲間は集まるだろうか。

少し高揚した気分でその日は帰った。

腐女子

キンコンカンコン

今のは完全下校のチャイム。

昨日姫鬼先生にたつぷりしごかれて、一夜漬けたので睡眠欲に負けた。

授業中もぐっすりと寝てしまった。

そして今の今まで寝ていたわけである。

とつとと帰り支度をして昇降口まで降りる。

その時、掲示板に妙な貼り紙が貼ってあるのを見つけた。

その内容がこうだ。

特殊性癖に悩んでる方募集。

もし集まる気があるなら、放課後、特別等四階一番端の教室に集合。

「行ってみよう」

即座に決定した。

私は昔からこういう謎が多い類のものには、進んで首を突っ込んでいたので、今もその癖が出てしまった。

が、私は人には言えないある特殊性癖があるので、癖が出てしまう

前から行こうと決めていた。

不思議な貼り紙だ、と思いつつ今日のところは帰った。

続く

百合男と腐女子の自己紹介（前書き）

ここから全部百合男視点です。

百合男と腐女子の自己紹介

空き教室

「
.....」
「
.....」

.....
気まずい。

今、僕がいる場所、それは昨日の貼り紙に書いておいた空き教室である。

僕が通っている学校の名は、私立天馬学園高等学校。^{ペガサス}

.....この学園のペガサスという名前は学園長が決めたらしい。勿論この名前にしようとしたときは家族からの猛反発にあつたが、全く聞く耳を持たず、学園長が「この名前がいいんだ！」と言ってペガサスという名前に決まっただけらしい。

.....学園長には悪いが、恐ろしいほどのネーミングセンスの無さだ、と僕は思う。

空き教室のある場所は特別棟四階の、いちばん隅っこにある。

特別棟とは、五教科では使わない部屋があるところだ。具体的に言つと、技術の勉強などをするときに使う 技術室、家庭科の時に使う 被服室、音楽の時に使う 音楽室 などがある。

その一番端っこの最上階。僕はそこにいる。

無論、この部屋は何も特別なところなど無い。

普通の教室。

なぜ特別棟にそんな普通の教室を作ったかは知らない。

そんな事よりも今はこの状況をどうにかしなければいけない、とにかく気まずい、とにかく気まずい。

僕が気まづくなっている理由、それは昨日会った女子が目の前に

いるからだ。

僕が初対面で「可愛いけど興味無い！」と言ってしまった女子。少し茶髪が混じったサラサラヘアをボブにしている、かなり整った顔立ちをしている。

「可愛い」と「美人」を掛け合わせた絶妙な顔立ち。

……本当に後悔してる。こんなに美形な顔をしている人に、「興味無い」と言ってしまったことを、本当に後悔している。

後悔してはいるが一つだけ良いことがある、塾で感じた仲間意識の理由がこれで証明されたからだ。

彼女も僕と同じように、何かしらの特殊性癖で困っているんだ。

そう、僕も困っているんだ。代々続いてきた篠崎家の家系を、僕の特殊性癖なんかで途絶えさせるわけにはいかない。

そう思うと不思議と勇気が湧いてきた。でも初対面での最初の会話ってどう話せばいいんだっけ？

と、いうわけで、いきなりだけど、どんな特殊性癖を持っているのか聞いてみようと思う。

「あの、どんな特殊性癖を持っているんですか？」

「……………っ！」

そう聞くと、彼女は驚いた顔をしたのち、肩を震わせてこめかみに青筋を浮かべ始めた。

何だ？ 人が訪ねているのに返事をしないと、と思いつつも、もう一度訪ねてみた。

「聞いているんですか？ どんな特殊性癖をお持ち……………ッ！」

僕の言葉は途中で途切れた。

なぜなら今話しかけていた女子に顔面を回し蹴りされたからだ。ナイス、クリーンヒット。

そのまま僕は吹っ飛び思いつきり机にぶち当たった。

「うう……………ッ！」

「誰が初対面で女子に『どんな特殊性癖をお持ちなんですか？』って聞く男がいるのよ！」

どうやら先ほど肩を震わせていたのは怒っていたらしい。

せつかくの綺麗な顔が台無しになるほどのものすごい形相で僕を見ながら怒鳴りつけてくる女子。女子からこんな扱いを受けたのは初めてだ。

「あんたこの学園で有名なイケメンだけど、とんだバカでしょ。普通初対面なら、名前を聞くとかぐらいあるでしょ」

「……ッ！……よでいどおり、うざどげだな」

「今『それがあつた！』みたいな顔してたわよ」

「……………チッ」

「あんた今舌打ちしたでしょ！」

「してないしてない、空耳だ。ところでお名前は？」

さっきまで鼻を激痛が襲っていたのだが、それも治まったので、改めて名前を聞く。

「はぁ……彩陶桜よ、よろしく」

桜は彼のスルースキルに呆れながらも答えた。

「僕の名前は篠崎徹、これからよろしく。ところでどんな特殊性癖を持ってるんだ？」

「ま……………」

「ま？」

「まだそれを言うかぁぁぁぁッ！」

「ぐぼふッ！」

結局徹は完全にキレた桜のとび膝蹴りを顔面にまともにくらい、意識を失った。

意識が戻ると時刻は夜8時、実に5時間は気を失っていたことになる。職員室にいる当直の先生に事情を説明しに行こうとしたところで、体が止まる。……どうやって説明すればいいんだろう？ 結局の所僕は「女子に襲われました」と言って当直の先生に家に帰らせてもらい（女子に襲われました、で納得する教師もどうかと思うが）その日は家へ帰った。

明日はちゃんと自己紹介したい、と思った。

続
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1917z/>

百合男と腐女子とその他もろもろ

2011年12月20日18時53分発行